

複雑で多様な現実を見よう

参加型システム研究所理事長

神奈川大学名誉教授 橘川 俊忠

◆人多様な現実を覆い隠す言葉

何か新しい物や現象に出会ったとき、人はそれに名称ないし特定の言葉を与えようとする。そして、名称ないし特定の言葉が決定され、それが社会的に使われるようになると、その対象となった物や現象そのものを理解できたと考えるようになる。

その場合、哲学や社会科学の用語のように、厳密な手続きを経てできる限り対象に即した正確な言葉が選択されるならば、問題は比較的小さくて済むが、出来合いのその場しのぎのいいかげんな言葉が選ばれると大きな問題を引き起こすことになりかねない。人は、その出来合いの言葉に自分の勝手なイメージを詰め込んで、非難・中傷の意味を含ませ、偏見を助長するようなことが起きるからである。

最近発生した二つの悲惨な事件をめぐってマスコミやネット上で頻りに使われた「引きこもり」という言葉も、そういう危険をはらんだ言葉の典型であろう。無差別殺傷や実父による息子殺しという悲惨としか言いようのない事件と「引きこもり」という言葉が結び付けられ、「引きこもり」が犯罪の原因であるかのように報じられた。すると、「引きこもり」の当事者のみならず、その家族にまで批判や攻撃の刃が向けられるようになった。

しかし、批判・攻撃を繰り返す人々は、「引きこもり」というのはどういう事態を指すのか、それが社会的不適合という事態を示しているとしても、その態様やそうなった原因についてはどうなのか、という点にはまったく想像が及ばないらしい。現実には、かれらの想像力をはるかに超えて極めて多様であり、複雑な要因の重なりによって「引きこもり」とされている事態は生まれている。「引きこもり」という言葉が、その多様性・複雑性を覆い隠してしまうということにもっと敏感でなければならないであろう。

◆平均値のマジック

現実の多様性・複雑性を覆い隠すマジックとして機能しているものに平均値というものがあることに、こ

れも、最近騒がれている年金問題で気が付いた。例の不足分二千万円というやつである。六十五歳と六十歳の夫婦が九十五歳まで生き、二十一万円の年金とすると平均的生活費用二十六万円とするためには毎月五万円の不足を生じ、総計二千万が必要になるという。この二千万という数字も問題だが、この平均値で示された数字はどういう意味があるのかということをもっと深刻な別の問題が見えてくる。

政府の報告書には出てこないようであるが、年金額を基準にして、受給者の度数分布表をつくってみれば、度数分布の最大値は平均値よりもずっと下の方にくることは多分間違いないであろう。つまり、二千万不足はまだいい方で、そこまではない受給者の方がはるかに多いということである。所得格差・資産格差が大きくなればなるほど、平均値と度数分布の頂点の位置はずれてくるし、そのずれ方は拡大する。この格差問題を放置して、「二千万不足するから財テクに励め」というような報告書の姿勢は年金を議論する態度として大問題であろう。少なくとも、年金問題を議論する時には、平均値というものは、もはや何の役にも立たないことは明らかである。生活の多様な現実をきめ細かく把握することなしには、問題すらも正確に認識できないことを我々も自覚しなければならないだろう。

◆現実という言葉や数字の向こう側にある

たしかに、多様で複雑な現実を整理し、問題点を明確に示すためには、言葉や数字は不可欠である。しかし、その不可欠の言葉も数字も、使い方によっては現実の複雑性・多様性を覆い隠してしまう。特に、政治家や官僚、評論家を気取ったマスコミ人などが操る言葉や数字には、そういう使い方をされているものが少なくない。現実には、常に言葉や数字の向こう側にあるという事を肝に銘じよう。生活者としての市民には、現実の生活から問題を抉り出し、解決策を提起することが求められているし、それができる力があるのである。

(きつかわ としただ)